



重修真書太閤記

六編
三

459
53



門 5
459
巻 53

消
福
永

重修真書太閤記六編卷之七

加藤虎之助冠山の城責る事
并黒崎團右衛門不忠の事

天正十年三月筑前守秀吉備中國へ下向一宮地山のおお
たなる遊串山へ取のぶ里敵地の方位地の理を考へ玉ふ
よ時を三月中旬清明の節あり今作州より切て入北よ
里南へ向ふなり北ハ此節太一の丁位也百戦百勝の吉方
なり此期ををけしてハ又近々味方必勝の方角時取あ
るへから以進めや物共をせよ壯士とも三例の大音揚て
下知し玉ふ然共敵の城五所み川らあり志りも要害よ

同
攻
會
印

大正十年三月筑前守秀吉備中國へ下向一宮地山のおお

ろく其上も籠る處の侍は毛利家譜弟の勇士なり小早川左衛門督隆景の旗下にて明暮も調練ありける隊伍ありハ小勢といへとも軍令正して作法みたれぬ取らば里容易く落さん様をさき筑前守秀吉や久しく打詠めいざや今宵ハ鉄床山の麓まで押攻る陣を取夫まで時刻を定めへて野ともいへ澤共いへ路あり處を直筋違ひ馳入へハ續く勢ハ七十餘人知ぬ國まで始て道とふまこくふ我々も國常立の尊おれと放言しつゝ押たりけり叔鉄床山の麓につけハ長蛇の備を敷こちて用心嚴く陣を取首を尾とのつけひきさら手足をりり如く之爰まで再度もの見を出し城の大將の名を聞定めけり小冠山の

大將ハ林三郎左衛門尉就秀鳥越左兵衛季兼松田九郎左衛門尉保貞其外加番子金川孫次郎時國黒崎團右衛門唯俊其勢都合八百餘騎よて楯籠る由を言上し秀吉聞て其林鳥越といふ男ハ十餘年の昔よてやあふん一目見しとあり武勇の家よ生れてハ門を出る時よて其日の命の限里とおひへそ我も口らせや一人も志をくさと勢しこや左様よ思ひ切し武士も今程多くい得やとあふし類を以て友とをれハ同く籠る八百餘人も大方劣らぬものあらん此陣中よて是等とたやをく打取へるものハ加藤虎之助清正り郎等水村又藏井上大九郎加藤清兵衛飯田角兵衛森本儀大夫石野兵右衛門赤堀源右衛門等成

へいつてや虎之助もや馳向ふて備中備後のぬく若共の
居眠覺せと諫むへい清正ちとち擬儀せは木村井上引率
我手の兵士一千餘人を洲濱にたてて打立ハ檢使と
て杉原七郎右衛門尉家次と差添られたり

加藤虎之助清正今年廿二歳なり進放待の備を白井淨
三小學ふ其略ふ曰く先陣十人一行お立ハ二陣ハ五人
川、二行お立三陣ハ十人一行お立二陣の先陣おはる
る時ハ五人宛かそり三陣の二陣おはるも又然る
抑加藤の先祖を尋れハ大織冠鎌足公の後胤九條攝政關
白忠家公の二男もて藤原正家といふ人あり天性武藝と
好むおまゝ華族を遁れ邊土お住むひ自ら加藤武者と

名乗玉ひ蒙古合戦の時に出陣し多く異國人を打取て名
を九州よ轟かしけ純ハ關東より呂文のありけるを見て
我を打物取て叛逆人を滅し弓箭を帶て戎狄を退けん
を好むり故よ西國へもせ向ひしふれ所領杯のふりさ
よ軍をしハあらドものを尋常の侍品と同一様もて
あされしとのおりしよ但軍ハ思ふおとしたり首をも
手足をも切たさかとい切川今をおひひをのこまとも
し然ハかゝれて鎌倉將軍おりのをおもせせもやとて何
處共お立退しとく其比鎌倉の將軍を京都より下向あ
りけしハ自己加藤武者といふをせお交るため假名お
と誠ハ九条殿下の公達と志らせぬハ正比らお尋ね玉

へと遂は行衛を求め得以兎角をる内世の中かそり鎌倉
 も亡び一かえ心の終に世を渡り正家十代の孫加藤四郎
 頼方り時よ始て尾張國愛智郡中村の里よ住たりけり頼
 方り孫を小次郎清信といふ清信り長子五郎助清忠とい
 ふハ即清正の父也清信り妻を筑前守の母御前の故母ふ
 れハ筑前守と清正ハ從弟違よてをありける然るも清正
 五歳の春父よ後れ一ハ其母か一こくも女の手許も男
 子を育てんとい覺束あしそて筑前守のいあ、藤吉郎と
 いひて長濱よ住ける処へ連来て如何ふもして男よあ一
 て給ゆへと頼一ハ藤吉郎是を請取長濱よて養育し
 ける小天授たる武勇の魂あれハ多くの人よ勝れ八九歳

より並の壯士も及えぬ働けきは秀吉世よ頼母一も
 もの思ひ川、所くの軍の先手よあ、め又ハ横箭を射
 させるとしてころこけるよ何もく秀吉の心よ協ひ實よ
 末代の大將軍かると其齡の川もふを樂さけるか今年ハ
 既よ廿二歳身の丈七尺よ餘を筋骨ふとく力五十人よて
 引動しかたきものを一人よて安くと取回しけるよて
 大形六十人の力も有へとを沙汰したる然ハ是冠山の
 城攻の時よりよ先鋒の大將といあしてけり相從ぶ者
 とも世よ勝れ中ものなり一ハ我主の今日大將を免さ
 れよをよるこひ一足も引ふ引しと互よいさめ合えい
 と聲いさましく寄るやいふやま川矢合の鏑射よりけり

と関を作し責鼓をうちて隊伍の次第をたゞし楯を突
並べ竹束をうち其間より足輕を進めて鉄炮をうちかけ
るより城中おても兼て期したるよりから加藤を
さおぬく仕寄たるは並くの武將とおゆをいれ必定羽柴
筑前守あふらぬ初て上方勢との軍ありとるひれふバ毛
利の旗の表よごし面く能心して防ぎ強へや然めても
より筑前といふ男を一目見をやとて大將林三郎左衛門
尉大手の櫓より上を狭間を開きて見るとせは水色
小題目を記せし大旗は金のわらわさの馬印を押立たり
三郎左衛門尉大音をかけ是ハ毛利家の侍大將は林三郎
左衛門尉就秀めてい寄るは誰めておをらん名衆とる

へと呼えれハ木村又藏進と出是ハ羽柴筑前守の侍大將
は加藤虎之助り郎等は木村又藏とりのみていと答ふ
ハハ林再度立あられ然る筑前守の郎等ある加藤とや
らハ我ハ籠りたる城より軍せんとハ近比以て
不當なり罷退け虎之助といふ終に滋藤の弓の握太く稍
ミハかき大矢をうちくせよ引てひやうと射れハ
加藤馬の前ふる楯をくざと射穿して鏃三寸あまり貫
たり清正られをきて手荒ふる林り弓勢や弓ハ加藤
射るりのよといふより早く糸包ぬり籠藤の弓おつ取三
年竹の尻よの備前鍛冶の鍛たる鏃ををけ推し
射たりけふ箭おさく林り弓手の袖の二三の板を後さ

八城よりも嚴しく防まけるふより加藤清兵衛鐘を鳴し
て諸軍を引上るゝ息を継ぎんとなしけるを城の川よ
ち引却くとや思ひけん城中の兵士堀の上より立ちあらハ
れ上方武士も口を似せせ臆病の者こと兼て聞に少
しも違えぬ我等り防く強さにさそげ立後を見れば
地よさそ一度も川と笑ひけるを寄手の方ふハ是を聞
逸雄の若も共憎い敵の荒言のあいてその義ならは其
堀引破て棄へるといふより早く大浪のかへをり如く
取てかへせり付く責し程は城中舉て爰に集り命を限
りに防くを見て搦手は向ひし飯田角兵衛時分ハよさを
そかれと聲をかけ真先に進めは飯田り手の侍共誰り一
何も世もゆるされぬハ打をも射をもせ終
城戸際よて押寄て堀は熊手を打かけ衆入んとひりめけ

ぬも射たりけりまおとよ危き矢川が今少しひ川また
らハ唯一箭は三郎左衛門命を殞たへりけるものをあ
かおそろり弓取あると就秀心中よりふりく怖れそれよ
りしてハ狭間を塞ておもてを見をん持口くも配を付し
鉄鉋を放ちあハ大木大石を投げけ防まけるふより
寄手はこし猶豫して見へハ加藤清兵衛諸手を乗廻
し高き向ふて軍をるまハのけ甲ふ緒をしめよ敵を甲の
ハ幡座を目おくふるれ但餘りに仰の眉間を射らる
る弓鉄鉋の差引も心せよと下知たり味方の勇士何も
何も世もゆるされぬハ打をも射をもせ終
城戸際よて押寄て堀は熊手を打かけ衆入んとひりめけ

人も後るべき我こそ先よそか川さりき城の後へ廻りて
見れハ誠に大手の軍大事と見へて搦手ハ防く兵も見
へざりけり角兵衛城門の際まで打寄て城中の体を伺ふ
了本丸とおろしき処小當り頻々物音さそりく聞え
かハ何事やあらんとや仰て見上れハ黒烟天を焦し
て夥し折節山風勵くおろし来て火の子頻々舞上りかけ
並べた不役所く唯一面小焼上りけるを消んと人々騒く
形うされとも壯士盛ふるりのハ皆大手に向ひて戦を急
小してこれを知本丸ハ老武者またハ幼稚のものや
是弱の女輩のさるれハ烟もむとひ炎も迷ひあきれえて
てせんをべーらにあれよくとさけふのミ次第子焼つもの

本丸の片隅よこひ置し鹽硝子火移り砂石を飛して百
千の雷の落ゆるるかどく鳴るため角矢倉も燃ゆる不
比林三郎左衛門尉馳來り是を何様謀叛人ありて火を付
しと覺ゆるを門より外へハよも出し搦められよと下知
されハ鳥越松田も持場を捨て走來る清正是を見て思
よらさる仕合か多此際も門を打破れと米配を取て諸侍
を進ましむる折しもあれ城門を開て武者一人真一くら
よ走出持たる鎗をおけ兼曾を脱てかけ寄を見て味方の兵
士我打取んと鉄炮を差向けれハ軍目付の石井兵右衛門
急度目付降参の侍り城方の使ならん過るかと制しける
程も城中より追手とおろし二三十人逃れおしと追掛た

兵右衛門何連も彼ハ味方を頼て落來るとやしく追
手ニ渡れも心ふし夫打止よと下知されハ足輕とちり筒
先揃へてうちかく玉玉當て六七人をらくをつと倒る
るをものく屑とせせ進むを迎へて鎧を合は其間も彼
歩武者を取押へ本陣へ送てけり清正いよく勢をばしを
やわくれくと立上り自身鎧を取て駈立く城門の升形と
乗破冠山の城の一番乗加藤虎之助清正こと呼されハ
江州甲賀の住人忍組の美濃部十郎次郎同く二番乗と名乗
杉原七郎右衛門尉り郎等山本新八郎三番乗と呼りく
走廻る城方よりも鳥越左兵衛三尺計の大身の鎧を提
けいさ參ろふと聲のくるやいふ虎之助も突くわくる清

正莞尔と笑ひやきりき人の振舞や寄手の大將加藤虎之
助と城の大將鳥越と互も不足をあらり引る其場を動く
るに聲の下よりい出以鎧の穂先の鋭さハ秋の野もせ
に招くなふはさきに贖て目おれ何も手練の上ふれ
ハ勝里劣里ハあけれ共加藤の鎧を請損し鳥越眉間を突
るれハ血流れて目くらめ馬より下へぞうと落お川を
いさかさ加藤り馬廻りの侍かけよりて首を取松田ハ
鳥越と加藤り戦ふ其隙に城門をメるやとあせる処へ井
上大九郎諾寄て何よ御大將加藤り郎等井上大九郎見參
をなやと進む終三尺五寸の太刀を以て拂切り切たてら
れ今ハ叶えいと水の手指て落行処へ森本儀大夫走り寄

又廣の鎗もてぶさと突此方よりハ井上ハ打大刀左の
肩より乳の下切けて切らるるれとも首をハ井上取て
けりハハ里けれ城中ハ詮をへる傘と出して降を
乞とハとも寄手目も掛加藤虎之助清正杉原七郎右
衛門心た責又責付れハ金川孫次郎是さて好うと思ひ切
飛鳥の如く切て廻るを木村又藏かけ寄て金川ヲ揚巻を
引切れて引みを押へて首と取夫より本丸誥の丸まで
切入て城ハ残る処の老弱男女一人も残は切殺し見れ共
林ハ影も見は是ハ水門より逃出て高松さして落たりと
之斯て城をハ難く責落しよきりの多く打たれとも其
名字定ハ知者おしよりて其降参の者を呼出しつ其

名を尋れハ黒崎團右衛門といハ次ハ多く首ともを見
れハ是ハ誰あれハ何某と知れハハ打取ハ面ハ大ハ勇
ミたちける処ハ井上大九郎森本儀大夫と相討せハ首を
見まれハ黒崎躍上り其首をえつハ蹴たり井上森本大
子怒里我ハ打取ハ首を足蹴めをし糸以外の無禮
りのハをハと誥よれハ黒崎大ハ恐れあまりの嬉さハ
心轉倒ハ思ハ失礼致ハ其訊ハ御大将のハ前ハ開
き仕るハと誥ハハ杉原七郎右衛門井上森本を愛ハ
大将の陣中ハをハと誥ハハ志志てけり
冠山の城落去の事
并九筋與次兵衛來由の事

六月廿六編卷之二

羽柴筑前守の本陣鉄床山へ加藤虎之助清正杉原七郎右衛門尉家次冠山みて打捕一首並に生捕且降参の黒崎團右衛門を召連参上軍の次第並に諸侍働きの剛臆を言上一夫と賞罰を中沙汰一けるに清正初て大将を承えり手間隙いらを一城を落せしと筑前守の眼力違に名譽の正なりさて大に褒賞ありて國行の太刀を賜るに次よ黒崎團右衛門を呼出し其方ハ輝元朝臣重恩の者と聞且當城へ加番として籠るゑの何等の故に城門を開て降参し何れなる遺恨ありて井上森本ら相討みせし城さめもの首を土足に掛しその中諷あらに速に言上をへしと有時團右衛門にけふハ元来其ハ當地の者にて兄弟三人

これあり妹ハ毛利家ニ宮仕と一に計らに輝元の内訃に寵愛厚りしほとに某も手元を召仕をれ金銀も不足なくいひしを松田九郎右衛門是を嫉み京都より名たるる妓女を呼下し同く輝元の側へ出しかハ輝元是をも妾として妹と同く様は寵愛ありけり故にいとみ新子ハ親む世の習われハ夫とハかゝり妹方へハかれくハあり極くを女心と怨まかこちたとへハ五月の藥獵に初てめ川ら一と思ふて折し花をから新花のかきそよ川にそやく取川るハ志不きて色のあせるより終に是を打捨る我身もこれとさる似たり遂に志不れて花の香のうさるん時よをてらる夫ハ浮世の習ひし人をうらむん様を

あり惟何とふく暇を給ひへ刺髪深衣の姿とあり世を
のとやりお暮さをやとりけるにより輝元不便におも
れて首尾能暇給一か八頓て戒をうけ尼とあり今ハ備後
の月聖寺へ行ひてまゝ侍るは是ハ妹ハ心あり替
松田を恨むる一川形次其元未船頭ふて竹鎗を以て
魚をつき鉄炮よて撃を撃弓よて鳥を射を能せ一程
稲妻と里人等よ呼れたる當城の加番相越ハ時傍輩の
許ハ酒宴して松田と同席せ一時ハ盃差てハ肴ふとて小
唄謡を舞をま折ふし松田ハ差たる盃を某ひりへて在
ける時今までの頃おれハ小唄うたへと有ハハと某元
り家業ハ世話ハく游藝更ハ覺悟を以當惑せハを笑ハ興

ハ小歌うたを以ハ舟歌もよし舞をまはハ魚を突鳥を
いる真似して差互へといひけるハ某ハ素性を知らハ戲
ハと但船をくつてハ如何ありハ邊こよ打卧玉へそれを
船として魚鳥おけれハハ邊の腹を海よ見立て射留川へ
ハ云終に立上り弓おつ取松田を引ふせんせハハ
人ハ中へかけ入て無事を嘖ハ事を三たり然共松田ハ我
を朝里ハ意の内の恨めハ是ハ二川其後武邊の咄の其折ハ
鎗ハ竹鎗鉄炮ハ鹿鉄炮弓ハ鳥おとハ是ハ重代の
武士の家ハおきよ望く某を歴ハ多く居あらハ座
中ハおいらハ嘲弄をハ正おそ取ハ深き恨おきハ三川
是等の恨をえらさんため松田ハ持口の小屋ハ火を掛ハ

ひし存の外大火あり終に本丸まで焼登る故に勢
を引入松田を討せしむと存ゆて城門を開てゆけり
左程の恨深き松田り首故にけをもりさし足めて蹴てゆ
ひし只願くハ失禮の罪を許され三川の早業の内一川
ふても所用に立へくハ奉公仰付られ下されゆへと願
ひ々れハ筑前守具又聞届けられ志そハものゆいそ
黒崎の顔を守りて居玉ひけるか為有ていふ團右衛
門汝ハリ狀理あるふ似て更に理るし愚癡の者の心ハ
説可も有りふす一けれ共いそ罪も正され汝り妹ハ心
さとく盛者必滅の世觀一尼と成しむ感をも余有然
るふ其方ハ輝元朝臣の厚恩ふて侍の形ふも成し非

夫を何るれハ松田又朝弄され一恨を晴さんとて忘却せ
一そや汝り妹ハ新人の妓女ハ寵を奪られても更ハ輝元
朝臣を恨に及又新人をも悪といふ只我身を觀し真の
道入し非や其方り松田を恨て輝元朝臣の恩を忘
れしあくらへて雲泥万里の違ひありさふと思義を知ぬ男
ハ侍の列入難し又其方り藝何またけたり共竹鎗より
ハ真の鎗より魚と人とい同一切ら何不と精り中れ
ハとて獸と武者とい違ひ有鳥とい鷹とくらへし汝り
弓を切りるふ及そ然れハ其方り藝一川として秀吉り
方入用をさしれハ抱へて詮ふし無用の者又あたふへ
き扶持米もたぬ秀吉を頼んより閻魔大王を頼むへし早

首討と下知一玉へハ承るり川と答ふ不詞の下より陣外
子引出し首をそねて獄門子おそわけられれこの團右
衛門ウ弟與次兵衛ハ此事を聞て大ニ怖れおまゝおまこ
こ子有てハ人おあふ團右衛門ウ弟とてめーとらるまー
きにも非をとて備中を立のき九州子下りて船頭とあり
居たりけるか心中お秀吉をふりく恨ミーとこ其の本
末ハ文祿の巻子説くくるを見よやわくて虎之助ウ勲功
を賞せられて感狀を賜るりけり

備中國冠山之城責之刻一番乘入鎗合高名無比
類粉骨之至ハ褒美之頌知重而可下行者也仍感
狀如件

天正十年三月十八日 秀吉

加藤虎之助殿

流布本此卷説く多く混乱して條理定りからに
一本子寄て改正候

重修真書太閤記六編卷之七終

天正十年三月十八日

重修真書太閤記六編卷之八

黒田孝高忍山城を責る事

并世砂り密書露顯の事

然も三月十八日冠山の城を攻めんと落去せしかハ事始よ
悦宮地山の良忍山の城へ押寄んと總軍いさゝ立抑
此忍山の城ハ前子小川の流深くめぐり後子忍の山高く
聳て數十丈峨々たる巖苔をめぐり鳥もかよひか
たしされとも峯より見れハ城ハ誠ニ眼下ふしてかけ並
へたる役所く手子取如く見へたりけり若九郎判官の如
き武畧絶倫たる大将有て是より火箭を射られぬは城中以

の外に難義をへしと兼て思惟し爰に岩を構へ衣笠右衛門尉俊治岡惣大夫成義を大將めて三百餘騎又忍山の續鎌倉り峯の城ふハ乃美少輔七郎元信三刀屋彈正久祐同き第三刀屋弥十郎久國を大將として爰にも三百餘騎を籠られたる忍山ハ日比右衛門大夫政之野山宮内少輔光實を大將として前藤金八郎木村辰五郎を加番として其勢千六百餘騎兵糧玉藥澤山小貯へたきハ五年三年籠城をるとも事闕まりと思へハ勇氣凛くとあたりをえらふて待かけたり

陰徳太平記又天正十年四月上旬筑前守秀吉備中國宮地山の上遊櫛山へ押上宮地山の城ハ乃美少輔七郎

元信ニ居たりけるハ備前勢熾ニ可相渡由いひ送る小依て明渡しぬ冠山ハ清水長左衛門尉宗治ハ與力林三郎左衛門鳥越左兵衛松田左衛門尉等籠居ける處ニ秀吉暫く岡山ニ在て同十二日より廿五日迄高松表ニ陣を居られける間冠山をハ備前勢にて攻し処銃炮の火繩の火柴垣ニ燃付終りあたりの藁屋ニ及ひけるより城周章しけるを時として加藤虎之助一番ニ乘込美濃部十郎二番乘山下九藏三番乗して各々粉骨を盡し是ハ於て城忽ニ落しハ林鳥越松田ハ一方打破して高松へ入とあり

寄手の大將黒田官兵衛尉孝高蜂須賀彦右衛門尉正勝を

よび荒水平大夫盛常都合其勢一千餘騎めて忍山へ押寄
ま川軍の作法明き鯨波をつらり矢合の鎬を射鉄炮を
えねし掛川攻のなる此麓を流る小川さの深くハ
あぬ共水勢早くして瀬高くされとも孝高正共せは真
先へ馬を乗入一ハ大将も續けくと呼そくえい
聲を上て攻寄る城中ふも初て期一たる事あれハ
とも動せを面くの持口を固め鉄炮を合せ箭を射出し爰
を専途とて防さける寄手の聞ふる勇將もそれ子従ふ
侍とも何連も名を得し兵士あれハ撃とも射共事共せは
入替く夜昼たゆまに攻一ハと城中少一もあはる色なけ
れハ孝高急度思案しける様寄手偽り引ふらハ城中より

打て出我を追んこかせくへし其時よき盪合も取て返し
一搦もまは城を付入もなるかさあハ能者二三ハ打
取へしこて一二の責口を引上て引退く体を見せ一ハ共
城中めて早く是をさとりて殊更も諸手を志何め音も
せは時廻りの鼓の聲のとや打をやし弥堅固も守り
一ハ寄手の調畧相違一て如何もへきと評定一ける
お荒水平大夫進と出てける様此城要害宜く矢玉薬沢
山あれハ容易も責拔かたあるへしい川も城兵をお
おき出さ隠一てハ合戦の勝負を定めかたなるへしとや志
りも黒田官兵衛大も氣色を損一是ハ思ひもよらぬ軍の
評定かゝ要害能矢玉薬の多き城ハ責かた一といも要

害ありく矢玉薬少なり城あらてハ責抜いたしとやい
めさらハ籠城の兵士もなき処へ向ふ如しと云ふハ孝
高不肖なれとも無人の城に入て蝙蝠をたき覺かし唯
要害より城も去りも勇士の多く籠りし處へ駢向あて弓
箭の道を盡しとハ幾度もゆひし此城要害よけれ共
分内せそ勇士多く籠るとも二千人もハよも過一兵糧
多しとも夫程の兵士の一二年分も過へから城中の兵
士ハ一人討るれハ一人減して増へる憑り味方をこれ
と事替り討るれハ入替りて更に勢の減るる正なりし
孝高ふ於てハ一人もてあれ明日曉天を城を責へしと
居丈高ふありと旬里けり月いつれも大将の如く下知次第

て出陣の用意をなしたりけり爰は忍山の城主日比右
衛門大夫政之の本姓を尋ぬるに當國都守郡世砂の郷士
世砂庄右衛門と云もの子に庄右衛門ハ播州長水の城主
攝津守宗綱の後なり宗綱ハ應永の末赤松の為に城を落
され其身戦死し一族散々不落落失し時當歳の男子乳母を
抱られ備中國へ逃去来り世砂の里に生長しける元を
由ある武士の子也とて里の老弱を尊敬せられハハ毛
利家もて是を知召仕りやとの内意度く有しか共思ふ
不子ハ新参なれハもなきやされし思ふ程に當参し
て朝暮故参り追従せんも本意あらはとて徒草深き山里
の心の終に蔓るれる葎の門を差開て春秋安く過しける

内遂の縁求めいたし子息多く出来しかいをのりくらある
 勢ハ大形二三里り不どは満渡を今ハちやいと頼母しく
 あるは藝州の日比將監り壻とある男女を多く歡ひけ
 る其中より一人は外祖父將監の子とあるて日比太郎松と
 称するは後より右衛門大夫政之といふ弓矢取て世に許され
 一のハ毛利家よてまたのち一き者と思へハ出せ當城の
 大將も當たれぬれ庄右衛門を我子右衛門大夫より一方
 を請取る者も織田殿と云大敵に向ふ事を悦び我身を
 城外より有て去りも籠城の列も非はされハ何おもて寄
 手の圍を却り我子の手柄もあさを思ひ何みせま
 一と案しけるは急度謀を思ひ出しけるハ風勵しき日を

待て寄手の陣小屋へ火をかけへし然も陣中騒動しある
 其時城中より切て出るハ十も九も城方勝利を得へした
 こひ寄手を追拂ふまであそあからめ陣屋の作事を骨折
 てるさへよるこそ一城中もて手筈をたりへ給ふあとな
 蠻の秘法を以て白布を認め是を膚衣も作りて下部もハ
 其由を知らし著せ外より一通の文認め状箱も入て持た
 り此下部心ききたるもの形れはさうくしけり用意して
 何と不き郷中の者乃使も立し形して城中へまぎれ入ん
 と計りけるを黒田の小左侯見とわめて何ものも是を問
 ぬ其答定りあらは引捕り穿議せんこそかけるを見て下
 部逸足出し脱けをハさてハ曲者夫搦め取と大勢よて

大隈記 編纂之八

追駈しハ下部今ハかきうみ走り去り終り川端に追
詰られてせんかどぬく川へざんふと飛入たり黒田の兵
士追くま出来て見れハ下部ハ川中をえりる正あたりも
陸を走る似てもや向ふの岸近くなりならず黒田の手も
も水練ありけれハ續いて川へ打つれ川中にて追付是を
捕えんとおしけるま彼下部水練やまさうけんをて又脱
得せんと見るを見て黒田の兵士又走り續き終り手取足
取こるの岸へ引來れハ大勢にて高手小手のいましめ
本陣へ召具し大將へあくと言上をれハ孝高是を呼ぶ名
峰須賀彦右衛門尉荒水平大夫立りて状箱を開き見るま
一通を入たるのこもて子細にし是を讀み常の安否を問

文体よて世砂庄右衛門尉より城の大將日比右衛門大夫
へ宛たり蜂須賀も荒木も城中への通路使かれハ召捕へ
る筈なれとも是ハ差たる用もてぬしあら骨を折れる
この口惜さよこつぶやくを孝高きておろし人よ大
事の要を軽くし書露を以へたりや其奴を嚴敷拷問あ
れとありしハ足輕とも大勢立掛り既り拷問かけん
としける時下部白状しける様下部ハ世砂庄右衛門尉
召仕おる城の大將日比右衛門大夫の許へ使ふ出立し
其故ハ日比右衛門の侍おれとも實ハ此世砂子よ
ていへるよと云孝高聞きさも有へりさうて此状計に
ハあるまし外に密事の状あらんと様く尋ぬれ共これ

そ云へき手掛りもぬし孝高あそね罪つくりよ遊さそ
やと思ひふから熟これハ下部の肌衣の端ふあやしき文
字のあらそれ一あハ其肌衣を脱て是を見るよ

良久敷面謁せさるところ當城の大將として籠城の由
出身の悦しん中詞ちん寄手の大將羽柴筑前ハ無双の智
者と沙汰いたし城ち中油断有ましく我等近日の内
風能日かぜ寄手の陣へ火かけ可申其節打出られりて手
柄あるへしハ不具

三月十八日

世砂莊右衛門尉

日比右衛門大夫殿に宿所

とそよまれたり是ハ下部水み入し故かそくに志たりハ

文字の見へしハ初めより下部ハ斯と知をたらハ水へハ
入まし下に下部ハ口のさげぬしと用心をしハ却て事の
露えるへき端と成しそくやしけれ孝高是を筑前守の許
へ差出し老ハ筑前守脇坂糟谷を召出され世砂庄右衛
門を召捕來るへしとそ下知せらる脇坂糟谷二手ふあり
世砂り家の前後より込入是を捕來りしハ彼文書一布
を見せて庄右衛門をハ孝高ふそ渡されてけり

忍山城落去の事

并世砂庄右衛門尉主従火刑の事

扱も近邊の農民とも今ふも軍始まりふは心安く畑うり
正も成まりし其上ハ放火せらるは資財雜具一品も

残るまゝなり如何せよと心も空ありける所へ羽柴
 の陣處より百姓共打集り只今参れと觸たりしか何も
 驚きあうら遅参せはあゝのりかん我おられと参上は
 羽柴の手ふて福島市松立出今日晩方迄は百姓一人も柴
 二束藁一束川、持参るへ一價を品と引替ひせんと下知
 一けれハ畏り川と答して忽ち山の如く積上たり其後夜
 よ入て城より二町計へたて浅黄の幕をそり件の柴藁と
 積かさね真中へ大なる柱を二本あり立其柱小鎖を以
 て庄右衛門主従を繋ぎ其蔭小峰須賀荒木并黒田の家
 臣秦桐若浦上庄大夫立花七兵衛今や火をわけんと待
 けたり城中おても是を見付何ふ謀らんかハ井

樓を組よや然ハ井樓お昇上り処を鉄炮にて打落さんと
 ひめくを野山宮内少輔一向お止めけるハ今ハ風あ
 若鉄炮の玉火藁柴に移りたらんハ速に燃上るへし當
 城風下あり餘煙こあたへおひかハ味方却て難義及ふ
 へ一風變りかん時は火矢を射へて其用意をふける
 処へ羽柴の陣より平野權平城門の際まで寄來り城の大
 將へものやさんとかけは夫聞とて侍一人出ける時
 平野是を織田殿の大將羽柴筑前守り毛利殿の内内日比
 右衛門大夫殿へやへるこのにて平野權平長泰とや者と
 使よ立てはと有けるを聞て城中の者とも平野を討んと
 本丸へ呼入んと云を前藤金八おしきめてけるハ使よ

來りて平野一人討たりとて筑前守さの之事もかくま
然して城中無法のそそを請ん鬼も角も持參の品
を請取使者の申狀を聞へて云ハ何色も是も同意一右
衛門大夫ウ郎等豊田金吾と云者を城の小門より出し平
野權平小何事いと云ハ平野ウ供もたせ一白布の密書
と庄右衛門ウ書狀とを渡一右衛門大夫殿の以實父庄右
衛門の使を捕て穿議一ハ當手の陣屋へ火を掛んと
の結構明白ハ證據ハ此品々おてハ次又筑前守ハハ
庄右衛門事火を付んと企ハ上ハ世上の旋の通り當所
みて火あふりも行ふへくハ但内證ハ貴邊の親父の由に
ハハ一目見て死たきとの願ハ誠ハ不便ハ思われハ終

其願差ゆる一ハ早く御暇乞有へくハ此由ヤせとの使ハ
いとト平野ハ立歸る豊田請取て城中へ歸り入右衛門
大夫は落もふくかたり一ハ右衛門大夫櫓の上立あ
らそれ寄手の陣を見またとは寄手ハ日比を見まを
庄右衛門ウ子あると云より早く張たる幕を引のれ
ハ哀さかふ庄右衛門主從二人ハ柱まつありれたる終
ハか一とあたる傍ハ百姓を松明を振立て時刻の差圖
をまつ体を右衛門大夫きつと見ま如何せん身をもた
へけるを野山宮内少輔同く見ゆ居たり一ハあの体を
見て其終ハ打棄筑前ウ心の終に焚せハ父子の恩を
て勇士の本意を失ふといふハいさや右衛門大夫との一

刻も早く切て出庄右衛門殿を奪ひ取へといささ立ハ右
衛門大夫ハ手を合せ始めよりさ思ひ一かとも御邊の心
を兼つれハ胸も苦しくおめしのそ然ハ免あれぬささ
仕ると云よりそやく城門をハ文字お押開き會釋も形く
突掛さハ松明もちし百姓原肝をけし蜘蛛の子を散をり如
く逃散たり野山宮内續て切く出れハ前藤木村ハ城中よ
あまて日比野山の働を見物し危ふくハ切て出く助けん
ものとかぎと吞て守り居さう日比ハ難ふく庄右衛門の
前よ到り是を奪ひ取んとせよ鎖よてつあきたれハ左
右形く解とかたし足輕共柱をぬけやと十餘人物掛りよ
してえいくと聲かくれハ兼て斯あらんと謀り知て筑前

守相圖の太鼓をうりやいあや左右よ積たる柴の蔭より
黒田家臣秦の桐若唐團子の差物さ一六尺餘の鉄の棒
うちまき真先よ進み城より出し兵士を矢庭よ二人三
人打倒しけるをこて野山宮内少輔をおあのみせといふ
まに桐若めかけ討てかれハ桐若莞尔と打笑ひ城の大將
野山とのり某ハ黒田ウ郎等秦の桐若こといふまに捧取
直しそつと打てハ誤または鍬形臺の真中より頬當かけ
て打ひ一かれうんとにつけよ替るやいる其終息ハ絶た
うけり蜂須賀彦右衛門ハ日比を目よかけ突くか、まハ
日比をいまた年若し血氣只今盛あり持たる長刀水車よ
廻し走り掛りく去けれともいりてり彦右衛門あかあ

へき正勝りするとき鎗を請換し弓手の臂を志たか突
れ少しすはりて見へける処を彦右衛門得たりとふこ
と脇つ分をたく一鎗突通せは鞍ふもたまふはどあ
るをさうさけ飛下首かき切て立あり然庄右衛門主従を
助けんため切て出へさる正あから城の大將兩人共打
殺され首級ハ敵の鳥付ふつけられたれとも散る路上
横たえり飢たる鳥の腹をらやけあそれありける本末也
爰日比り從弟に米津弥五郎といふもの有けるかこの
隙ハ叔父庄右衛門を奪えんとそ一里寄を浦上庄大夫さ
はさせしそ大太刀打あり切て掛る弥五郎遁れあたく思
ひ一ハ二打三打戦ふといへとも今や柴火をあく然と心

も空ありける小寄何きもく請太刀ふの成けるか如何
しけん躰きころふ処を起しも立は首をちりや打落を此
者共ハ斯計粉骨を盡を見て黒田官兵衛尉孝高平野權平
長恭ひしくと城門口へ押よせ鉄炮を放ちあけ矢を放つ
城中ふも前藤金八木村辰五郎こゝありと聲を合せ
おめきて打つるを見孝高長恭をこゝ開いて此場をそ
つしハ木村も前藤も切勝たりとふさあさう川太刀
を引え川されく少しゆるむ処をたくまけ黒田前藤を
討取ハ平野も木村を討りけり今日の軍不意も起り城
の大將二人とも討れしのみから木村前藤まで同し
処みて討死しハ残る兵士も右往左往は散乱し忍山の

城を遂に落たりけり黒田蜂須賀勝鬨をあけ及かへりな
りら彼いまめ置ける庄右衛門主従の傍へ走りより桐
若をして柴火を付けさせしかハ暫時よりえありり兩
人とも真黒ありて死してけりさても筑前守今日の軍
の次第を聞勲功の甲乙を定めけるは桐若り打取首ハ野
山宮内少輔を始めとして十六あり今度の合戦秦の桐若
を以て第一と定められけり

重修真書太閤記六編卷之八終

重修真書太閤記六編卷之九

備前勢鎌倉ヶ峯へ寄る事

并片桐計る城兵を疲かせ事

去程不忍山の城落去せしかハ此勢をぬりさし鎌倉ヶ峯
よかけ向をよと諸將何れも勇たれと云共此間打續
き雨天小して晴間るけは思ひの外に延引せり爰忍
山の若衣笠右衛門尉俊治岡總大夫成吉を大將よて三百
余騎籠居けるか忍山落城せし上ハ何小堅固よ成る共其
かひあるま且味方ハ小勢なり寄手ハ大勢なり掛合の
軍叶ふさし早く鎌倉ヶ峯の勢と一川よありて戦を挑ま

太閤記六編卷之九

めとて取ものも取あへば岩を自焼して退たりけり乃美
少輔七郎元信ハ冠山忍山の城不日小落城一將大方戦
死一今又衣笠岡り落來りしをもよく寄手の軍立を
心より思ひ如何ある調畧をりあしつらん是を待んと安
りるに何よも前車覆轍後車の鑿誠小備ふへしと夫々手
分をふし今やくと待しかとも降志さふ雨の足篠をまた
して強けきハ敵も晴間を待よやあらん更も寄來る氣色
も見へば城中よてハ結句張つめし擬勢もたゆまひさく
の退屈の体小ぢ見へたり筑前守ハ此鎌倉り峯へ寄んよ
ハ誰と先陣とをへきと其人体を撰えれける小我もく
と望む人あを多ありけれ中も浮田和泉守直家去年二

月十四日五十三にして卒し嫡子ハ郎秀家今年十歳い
また幼稚ふれハ叔父七郎兵衛忠家代官として出陣け
るも進み出る様去年直家病死の後秀家家督を嗣てい
へとも無下よおさぬくハ當城ハ敵地の境目ぬり大
事の虎口といふを以て浮田信濃守同く孫助と者と去
年三月より差置ていひしと九月上旬不到小早川隆景不
意に寄來り短兵急に攻けるを信濃守も孫助も随分防戦
の手を推さるふくし弓矢を取ていへとも小早川勢ハ
雲霞の如く入替くもよにもんで攻しハ遂に二人共見
事小戦死していひし也元末秀家り城でハあり二人の郎
等り忠戦の供養も供えり度いさてハ此城責ハ備前の

六月巳六編卷之九

二

の者へ仰付られぬへりとおもひ入て申けれハ筑前守
もいると兼如何せん案煩ひと去る詞あり時福
島市松かたそらより居丈高のひ上り大音聲よおと理
不盡形り七郎兵衛御邊計り心の終る軍せんとハヤさる
たたとひ大將のゆるし有とも正則を除て誰り此城の一
番衆をたへきひりへめされと罵るを筑前守打笑ひい
ゆく正則りよこ紙破りの我意をそるとや秀吉存る旨
のある形れハ鎌倉ヶ峯へハ備前の勢をさむくへし秀
家家督始めハあり元來領知の城あり聞ハ西人の戦死
せし軍場形り夫等り子供も有へし花房助兵衛岡越前守
なと十分働きて秀家り手柄せよ片桐助作を檢使と

して差添る間能く相談して兼忽の軍をへから尋常小
責寄て早く追落しいへりとや渡され次は片桐をめされ
備前勢小鎌倉ヶ峯の先陣を付たり助作差添て万事油
断なく心を付よ其謀ハ此内あり時を考へて是を用ひ
よとて長持一さるたされたり

今按小片桐助作貞盛後且元今年廿七歳形り福島正
則ハ廿二歳加藤清正と同年形り然るを繪本太閤記ハ
片桐助作十四歳の時加藤席之助十六歳と記せるハ大
き小誤也席之助ハ永禄四年辛酉の生ふて慶長十六年
六月廿四日五十一歳して卒去形り其十六歳ハ天正四
年形り片桐ハ元和元年五月廿八日六十歳して卒去

ねハ弘治二年丙辰の生れみて清正小長と五年
 助作ハ筑前守の下知を守り備前勢を先立都合其勢
 千八百余騎鎌倉ヶ峯へと責登る筑前守ハ猶もとの処
 陣を居られ敵の動静に依旗本を以て合戦をたんと
 云勢を見せし備ふ小城中にて敵を責寄るあらんと
 五七日ハ待てひいかとも雨を日毎に降りきり路次ハ
 ろしあそれ此時責のなる敵あはれ不知案内の上方勢を
 さしも勵し坂路の若りも泥濘を曲し追攻て弓鉄炮
 をまひく射かけ打をくめて笑をいと互に語り合て暮
 けるよいか雨晴川ととも責来る敵もあし去ハ持
 場くを手配して上方勢を無二あ無三は揉立よと云

かとあれ敵の人數ハ二千餘り坂を上り攻よはる
 せよ筑前守の先鋒を誰あるらんとよくこれハ浮田
 七郎兵衛を大将めて續くハ花房岡を始として備前美作
 の侍共を旗の紋ふて知れたり乃美少輔七郎是をこて
 寄るハ備前の者共なり彼等ハ軍配ハ疾より知たり登る
 坂路におしわけ弓鉄炮の足輕をつましく伏置て一も
 急ま揉たらんハ備前勢裏崩れして忽ち敗軍不及ふ
 へし其時城中數を盡して切て出るハ筑前守の旗本もて
 切崩をへしと謀りけるを聞て衣笠左衛門尉俊春建三
 出さ少輔七郎殿の軍畧もと勇ましく且涼しく思えれ
 ばハ誰も跡も付て軍せえと存ゆへ共退て敵の容

子を考ル子筑前と云男ハ氏も素性も定りあらは織田信
 長の若き時より下賤の小者よめしはかされいひーか其
 性さうくーけふれハ取たて普請の奉行あるひハ炭薪
 の預ふんとふ心にて夫より侍とふー者か今ハ一國
 も二國も知行して弓矢を取れとたとへハ梢を傳ふまし
 らよ似たりとく猿と名ふ負ふふれハ冠山忍山もた座
 をく渠もおとされいこふたてもよく思慮をめぐら
 され備を堅くして城を守りゆえん其内ハ吉川の後援
 も到着をへし然らハ寄手何かと武ーとも攻る城ハ強く
 してたやをく落後よりハ吉川の猛將勇卒雲霞の如く
 續きたらんハ假令ハ猿もせよたやをく脱る三ちハ

あるへから終よハ筑前を討取り左もあきまても十分
 の勝利を得へき正掌の内ハあるへくいと諫ける處三刀
 屋孫十郎進之出て何さぬ衣笠殿のいなる、処然るへく
 覺ゆ味方万一さう寄して仕損しるハ末代よての耻辱
 其上ハ冠山忍山の落城せし趣き雲州へもちや聞え川へ
 し然らんハ今ハちや定めて後援の勢も途中おてそい
 そんぢらん志えーの間暇りまたせよへと異見をのふれ
 ハ評定弥々區くあて夫とふー坂中へ打出るとハさて
 やこにたり鬼角せし不と備前勢も坂をのりて城
 きえ近く陣を取とさら去年九月まで浮田の領知なり
 案内え知らう唯一搦よふ潰さるやとそやとけるを片

桐かたく制けふハ只今城ニ籠る者先達て冠忍ぶて思ひ
 の外ニ打負たりし耻辱をこの城ニてまぐらとて籠
 へしものもあるへし又元より此城を預りものハ冠忍の
 侍とももの如くも詭く落城して人ニ後指されんとと耻た
 れハ筑前守是を攻る方便を種々と工夫して某よりふく
 めてハ但昨日より城中の体を伺ふニ城を堅固ニ保お
 せ後援の勢を待て合戦せんと思ふと見へてハ然ハ逸を
 以て勞を討と云計畧を用ゆる時と覺えハこれ味方少
 しも損毛ふく唯敵を疲かを專一ニ仕ハ方便なり諸手
 の人々何れ忠功ハ同し事ニ決してぬけおけ有へりら
 助作りよき時刻ハ沙汰いたしハへし云ハ備前の侍も

足輕も静王やへめて音もせハ城中にてハ寄るハ備前の
 七郎兵衛ごさんふれ去年の恨をわへさんと短兵急攻
 るふらん其用意をせむとて矢狭間くハ筒を配り其際
 又究竟の射手を揃へ寄ハ射んとそかまへたり然とも備
 前の陣々ふてハ敢て戦を挑まんとせハ日ハ暮つさて
 ハ夜討よよはるらん其用意あれと諸方の口々一同ハ
 用心嚴重ハ待掛りかども敵を更ニ攻んともせハ然ハ明
 日の朝かけはあを寄んづらめ夜ハそや更た里兵糧をひ
 馬の飼能せよと下知しハ今やくと待ふとよ月落鳥ふ
 き渡り曙日うらくとさ登れと旗馬印ハおぬきも見へ
 以城中にてハ日一夜待りけれハかともハ於處へ寄んとや

そり油漸ハふらりと物具も解とるく馬の腹帯もゆる
べし待とも更々音もを寸志そし代りて休息せんとおし
ける時思ひもよぬ城の異の木立の邊まで関を作し鉄炮
を放音頻也城中おてハたそや敵の寄らるぞ用意をよや
とひーめけと敵を敢て近けり何よせーやと案し煩ふ
不とも其日既々暮そてくものあやめもつさかたくなり
川る間紛れ鉄炮の音そけーく聞え関の聲遠山谷よひ
けとも人馬の近けりけそひハせぬ城中の兵士ハあきれ
そて是ハ敵の謀ふて我等を寐させん勞かし其勞たる處へ
切あるへき調略と覺へたりさらハ少しにてもまるとろ
て身をやーふへやと枕まつけハ耳をのらぬ鉄炮も又

驚かされて眠里もやらに夜の明渡る山の端またか引雲
とまがふまて寄手の陣小相圖の筒音高くひけハ狼烟天
ふひるゆへに升降龍の五色の雲よふめ川らーく風おつ
れああたこなへ舞上りまへ舞下るおもーろさ軍の場
をも打忘れ餘念もなく詠いる城中の將帥ハ寄手の方便
計のね如何よせゆしと工夫を凝し矢倉を登りて見えた
せハ城外近く何の間よハ張たけけん備前勢の幕の紋きら
きらーく控見へたりけり城中おそハ敵斯迫近く寄んと
ハかけそも思えぬとるれハ仰天一何様不思議の軍畧あ
ふ何ふもして此勢そりりを追拂そやと其用意をふは処
よ又も響く鉄炮の音おつれて貝鐘大鼓を打鳴し大勢

の攻近はく音のーけるふより乃美少輔七郎今度おを誠
 に敵の寄来るるま此方ふも鉄炮を合せよやとて川る
 べそあーに放せーか共幕中にて寄手お當らば衣笠左
 衛門中けるは是ハ諸葛孔明ウ曹操をおひやりーたる謀
 然りふるし誰ウハ夫よ来へさや今宵ハ何おおびく共
 其方便お不来て休息をへーといふふと何まも馬の鞍
 をおろー鎧の上帯とききて前後も知を打ふーたり然
 るよ其夜の曉方に寄手の陣中さそがしく風お連れく
 聲さけハあるハ瀧の水兵の交り勇しかりけりふんと聞
 えーかハ然ハ陣中ふて酒宴をるや憎き敵の振舞やと櫓
 よりこれを見またさげそや酔たをれてたをひあく貝鐘

あんとを枕としさも快よけ又眠たりけり城將いよく
 怒を増しいさや打出て皆殺しおせんと立上る時三刀屋
 弥十郎是を止めてやけるハ雑兵共の酔狂人をうたんと
 て大將の打出あふハ餘も輕くし是をハ是輕共よ付
 鉄炮よて放へしと謀ーかとも幕中里て思ふ様よりち
 課を自然ハ打出る打やものとも下知ーけるを聞て岡
 總大夫いやく寄手の振まひあまりに心おろし我おもつ
 川いて駈出んといひけれハ衣笠俊春いつれも尤おハ
 得共只今打出るハあふし夜討を然るへもれといさ
 めかとも少輔七郎聞入ば衣笠のいそ影やうに敵をあ
 やぶてハ味方の氣を朽し寄手お威を付るよ似たりと

のめかくのみ只今打出て一軍せんと勇めハ士卒も一同
然るへしこそ勇またちけり

片桐助作富撃を用ゆる事

并兩將最期衣笠謡の事

其時乃美少輔七郎元信ら衣笠丸衛門尉俊春小向ひ御邊
の軍略然るへく思われ得共斯迄敵もあるとられおめ
くと城小の籠らんも餘里とや勇あきに似たりされハ
某は於そハ是非をいそ打て出へし其跡あて城の事偏
は頼入と云々れハ俊春何小もかこま更そハ但此城
を堅固小保あふるも實の忠義あらめとハ存してハ
得共丸様は思ひ切て仰らるを止めやさん詞もあし我等

らいつれも當城を死處と思ひ定めてハ得共今少し存
する旨のゆへハ御供ハ仕るま随分御働さゆへと云
一ハ元信ハ岡總大夫と共に三百余騎城門を開てまつ
くらふ打出たり寄手の陣中小丸おひしよと云
あくら立上りかともいたく酔たる者共かれハ矢庭小
二三十人計切倒されたり乃美と岡は是を見て手初め
よしと悦ひけり其次の幕の内へ切入んとせし時樽の側
をら不立たりける足輕斯と見るより持たる火繩を投て
て本陣さして逃入を見むきもせは已等小く駈とておが
まべきや此日比汝等又欺られて眠もやらを二夜三日勞
かされし正のくやさハ其首抜き思ひしらせん者とも

進めと下知しつゝ猶奥深く切て入あまりのらちよさに乃
美し岡も隊伍を三たして進まけり然もかの投付し火繩
次第は燃て樽のかその口まで来るやと見しより早く忽
は道火は移り樽はこめらるる焰玉をど走り飛ハ其餘の樽
へもうつり次第に移りて城兵の跡よりまろひるふか
とよ即死せるもの百餘人火傷のものハ數一らに乃美少
輔七郎岡總大夫火焰の中取こめられ忙然として立た
ぬを見り時刻よろしと寄手の兵士隊伍をたさけ切てか
かま進放待の次第整ひる前後左右よりうちてハ突立突
てち切掛あゝかを少輔七郎元信火毒ハあゝうり川手と
負川今ハ叶をしと捨鞭うちて駈出せハ大將ふるを遁て

まじこ手表けく責つめられ馬を棄て歩行岩根を傳ひ藤
蔓小取付て逃失り岡總大夫ハ大勢小取こめられ數ヶ所
手を負いかとも命を限り死もの狂ひは戦ひけるを浮田
七郎兵衛忠家遙見つけ岡總大夫成義のりをましと真
一文字は鎗を合は總大夫は富撃小當り上太刀疵鎗疵
あまたうけし處おれハ少したるまで見へけるを得たり
と忠家おめいてかま只一鎗は胸板を突通し馬より落る
を押えて首をかきおとけ掛りかとも城兵大は敗軍し
城門を付入せられし手を盡し志は共寄手大勢おれハ
塀を越て切入より終り城門をやふられ今ハ是さてそ
詰の丸へ逃こもる備前勢ハ去年九月の戦ひは親を討れ

大目己六編卷之七

十

兄をうたれー恨あ疵ハいつれもく死力を盡して走廻れ
ハ城兵かとくもてあまーける処を討てくめ射あらま
れて手痛く防くとせさうーハ誥の丸の城門も既
破られ兼てより設け置ける大筒おんとハ寄手へ奪
れー不と又敵を攻るとハ形く却て味方を破らぬ器と
あうーそ口惜や衣笠丸衛門尉俊春三刀屋弥十郎是
形うと思ひ切七百餘人討のこされしものともをめ
して一支えさえーかとも寄手強くして當王かたけれハ
片桐小向ひ軍の習是まてハ弓矢を取て周旋ていへとも
城を落て誥の丸計にありたれハ何と思ふ共運を開く
へ道形くハ我く二人切腹して此程の事譚を仕るへく

ゆさてハ雑兵原は於てハ御免を蒙りゆなくやとけるを
浮田七郎兵衛岡越前守ヤさへえけるハ去年九月味方を
討れゆひし恨のあるを以て士卒あて力を尽しハ事ゆ
然るを恨もあき衣笠三刀屋計ハ腹切せ恨ある雑兵を助
けんハ我等始め一同感心仕らぬまげて誥の丸お籠る
者一人も残さば討果しハ様下知有度ゆと中志り共
助作恨形き衣笠三刀屋ハ大將分取り夫等の首一ハ雑
兵の首の千二千ハ對しへー又此邊等ハ對し恨おけれ
ハ雑兵等ハ思も好もふし其好もあき大將さへ雑兵等を
哀れて命を請ふ非や夫はよく切果さんとハ大將た
る人の心はあらばといえれて越前も七郎兵衛も納得

大將言ハ編卷之九

上

然ハいつれとも檢使の内差圖ニ任せヤへしこヤける小
より片桐城中へ何れも此二人さへ切腹あらハ其餘ハ更
小子細ふしと免し、かハ衣笠俊春大悦ひ然て片桐殿ハ
真の侍かふ夫ニ付未練至極のヤ条よハへと某の首実
檢の後家來ニ賜るゆ様ハ一度とヤける小より其義
ハ本陣へ伺ひゆて後ニ答ヤへしとて筑前守の陣所へ注
進しける小此城の本人少輔七郎逃失て行衛しれを殊ニ
岡總大夫をハ打とり川衣笠三刀屋ハ元より籠城とし者
小もあらねハ首級ハ勝手次第取計ふへしとありけりハ
其由助作より衣笠より通し者ハ衣笠雙眼ハ涙をうか
へ筑前殿の弓矢ハ實ハ智勇たくよしそのそから以物部

の情さへふりくまハけりむべ西國を追く小切鎮め
よふとよ頓てハ三韓大明までも旗子おひき從えんを
草のかけみて見参らをんを遠くらし然ハ見届たさ
るべしとて大廣間の真中ハ敷皮着せ静小座を組陣太
鼓を鳴し所ハ八島の近くおれハ一聲うたふて敵の耳を
驚りさんと聲えりあけ小鳥と見へしハおろおろ士卒嵐
と聞えしハ時の聲ありけり此峯の夕の露とも消おける
とハ島のうたひを一編うとひ終り潔く腹かき切北枕ニ
うちふさは首をハ家來ありける吉田六郎うち落れ三刀
屋弥十郎ハいと閑あり座ニ就て我ハ乱舞ハ心を寄さん
ハ加浮世の名残一興をえへをよとて同く聲ををり阿

六段已六編

十二

けて道のべの露と消ぬるこの身おて志そしり不との世
の中を夢と一らさるおろきよと聲おもしりくうたひ
の腹十文字よかき破りかへた刀又喉のくさりをえぬ
切てうつあに伏たりけり是を見ける片桐助作浮田七
郎兵衛岡越前守何れも敵と云ふから尋常おとれしふ
るまひやと感てる聲いやまさりきさてしり約束かれ
二人の首級もろ共に骸を吉田六郎お取せけれい六郎是
を取納め自ハ髻を切本國さして引返し衣笠り後世を吊
ひしあり然のち此城元より浮田の持ふれいとて忠家お
あつけらむけるふより岡と諸共お旧領を取かへせしと
をよろこひ且ハ片桐智謀をかんし筑前守の大量ある

小恐怖し是より眞實小筑前守をたのもしき者と思ひし
とあり彼籠城の雜人原ハさして行へき所もぬく命ハ助
あれとも朝夕のた川さもあけれいとて筑前守の陣中お
めし連と堤を築と堀をからと又ハ薪をこる事を役おあ
てられしこあり

重修真書太閤記六編卷之九終

